
バカと悪魔と召喚獣

バジバジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと悪魔と召喚獣

【Nコード】

N4136W

【作者名】

バジバジ

【あらすじ】

双子の兄弟 雷と風、二人は誕生日に火事に遭い……。そんなこんなで常識人の双子（？）がFクラス色に染まっていく話です。多分……

懺悔（前書き）

へたでゴメンナサイ

懺悔

あの誕生日の日、きっと楽しいサプライズがあるんだろうと思って
いた。

俺らの父さんがまた、いつものとおりに楽しい実験をしてくれるん
だろうって。

俺たちは、毎年のようにそれを楽しみに待って（覗きはしたが）い
たし、父さんもはつきりいって楽しんで用意していたんだと思う。

だから、

誰も止めなかった。

父さんも、俺も、風もあんなことになるなんて思っても見なかった。

すべてをそのまま炎にのみこませば

よかったのかもしれない

そうすれば、

俺はまだ ”人間” でいれたかもしれない。

懺悔（後書き）

暗っ

十字架とぬいぐるみ（前書き）

親からパソコン禁止令が下された（泣）

十字架とぬいぐるみ

「おい、風どうだった？」

俺は双子の弟、風にたずねた。

「うん。いつもどおりにおぞましかったよ」

風はアハハ、と笑ってそういった。

俺と弟は双子だ。

といつても似ているのは姿ともうひとつの性格だけ。

俺はせっかちで、自分で言うのもなんだがヒトを従わせるのが得意だ。

弟はのんびりでマイペース、そしてパシリ体質だ。

似ているのは、姿と、

悪戯が大好きなこと。

「去年は雪の結晶だったっけ？」

「ああ、あれか。夏場にやるもんじゃないよな。わかってやってんのか。」

俺らの父さんはマッドサイエンティスト（自称、本当は何やってんのか知らない）らしい。

父さんは俺らの誕生日になるとおかしな？モノを作ってくれる。

俺たちはそれを毎年楽しみにしている。

母さんは、いない。

俺たちを生んですぐに死んだらしい。

そのかわり、近くのシスターの花さん（年齢不詳）がときどき様子を見に来てくれる。なんでも俺らの母さんと親友だったらしい。

それから二人で父さんがなにをつくっているか考えあった。

「そろそろお互いのプレゼントを交換しようよ」

これも毎年の習慣。

それぞれがお互いにプレゼントを用意する。

「ん、早いけどいつか」

そういうと俺は頭ひとつぶんくらいの袋を、風は小さな直方体の箱を交換した。

「うわっ、ちっせっ」

「へへ、案外軽いんだね。なんだろうっ？」

二人ともお互いを向いてニヤツと笑ったあと、お互いのプレゼントを開けた。

結局、

風^弟 十字架のペンダント

雷^俺 うさぎのぬいぐるみ

を用意していた。

「この十字架は…まさか花さんからもらったのか？」

「うん、前に雷が欲しがってたの。花さんに頼んで譲ってもらったんだ。(…いろいろ大変だったけど)」

前に花さんから見せてもらった黒い十字架のペンダント。

かっこいいから欲しかったんだよね。

花さんから物をもらうには…：大変だからな。(いろいろと)お疲れ様でした。

「それより僕の方はうさぎのぬいぐるみ？でいいのかな？」

ふわふわのピンクの毛玉に黒い目が2つ、バツテン印の口に黒いタレミミをたらし、背中にもウモリの羽がついたぬいぐるみ。

「ああ、俺のセンスのもとで選んだ」

こういう物は普通、男にあげる用のプレゼントではないだろう。現に俺も買うとき恥ずかしかったし。

「ぶっん、兄ちゃんにしてはかわいいね。悪魔っぽいけど」

しかし、風弟はこういう女の子が好きそうなものがすきなんだよ…
お前、男だろ…

「そこは俺の趣味、大切にしろよ」

ちなみにお小遣いの半分以上を割いたのは秘密だ。

「そろそろかな」

「だな」

10:00PM を時計が教えてくれる。

例年なら今から誕生日会のはじまりなのだが、

「父さん、遅いね。なにやってんだろ？」

父さん、地下にこもっているマッドサイエンティスト（自称）、が
来ない。なにやってんだ？

「時間忘れてるんじゃないんだろうな？ちょっと呼んでくるわ」

母さんのいない俺たちに父さんはいろいろしてくれた。

ときどき花さんに頼ることはあっても、父さんは俺たちをしっかりと
育ててくれた。

俺たちの大切な父さん

”どっして”

”ドウシテ”

部屋を出た俺は地下への道が赤く燃え上がってるのを見た。

夢の中の(前書き)

あー やつともしが終わった。

これで更新がスムーズにいくといいんだけど

夢の中の

いつ頃からだろうか、気がつくとも俺は真っ暗な空間にいた。

「ん〜、ここどこだ？」

そういえばさつきまでとなりになっていた風がない。

……………はっ！

「火事は！」

「落ち着け、弱き人間よ」

誰もいないのに声だけが響いている。

……………うん。ここは夢なんだ。

きつとそうにちがいない。

「よくわかったな。ここは貴様の夢だよ」

…心の声を読まれただと！

あっ、夢だからか。

「解釈は自由にしてきてかまわない。ここは貴様の夢だからな」

正体不明（さつきからの声）の声だけが響く。

てかお前誰だよ。

「俺は貴様ら人間のいう悪魔と言うものだ」

いきなりファンタジーの世界になったな。

急に目の前に小さなヒカリの玉、たとえるならそう蛍の光、があらわれて、あたりいちめんが真っ白に・・・

「って目があああああ！」

あまりの光に目がクラッシュした。

「…そろそろいいか？」

正体不明がそういつてきたので目をあけると、

「ナニコレ？」

風にあげたはずのぬいぐるみがういていた。

「僕は見ての通り、悪魔じゃ」
いや、ぬいぐるみがういている姿はオカルト現象に近いと…

…まあいい話が續かないし。

「僕はもともとぬいぐるみのなかで安眠しておったのじゃが、どこぞの間抜けが買っていきおったんじゃ。」

それって俺のことかよ…

「おまけに焼かれそうにはなるしのう」

そうだ

「風は?!」

「貴様の弟(?)ならぐっすり寝ておる。安心せい」

よかった。間に合わなかったのかと思った。

…それにしても

「なんであなたはここ俺の夢にいるんだ?」

「やっと本題に入れるわ」

「本題?」

ぬいぐるみは浮遊したまま翼(コウモリの羽みたいなの)をひろげ

こう言ってきた。

「単刀直入に言う、儂と契約をしろ！」

「……………ナンデスト？＼（ 〇 ）／」

はじめにでた言葉がそれだった。

ふつうに考えてみてほしい。

自分の夢のなかでぬいぐるみに契約しろ（笑）といわれるのを。

……………わけわかんねえ。

「本当にいいのか？貴様にとって最善策だと思っが？」

「なんで？」

「だって貴様あと少しで死にそうだし（笑）」

夢の中の(後書き)

本当はプロローグは3話で終わらせるはずだったんだけど、まだ続きそう。早く本編書きたい。

契約？そんなもんすっ飛ばしますよ（前書き）

なんかくだけたかんじになっちゃいました

契約？そんなもんすっ飛ばしますよ

「ちよ、俺が死にそうってどういうこと？」

「貴様らが火事にあつたことは覚えておるか？」

「…地下室から火が出た。でも、そのあと風とちゃんと脱出したはず」

「一酸化炭素中毒、だったかの？それで貴様は倒れたんじゃないかよ。」

「こりゃ風よりも煙を吸いすぎたせいなのか？」

「んで、貴様は僕と契約をむすぶのか？」
「なによりもそれが気になるのかよ。こいつは。」

「…まず、契約の内容と長所メリットと短所デメリットを聞かせてくれ。話はそれからだ」

悪魔（奴の自称）によると…

契約とは、悪魔が自分の認めた人間を悪魔にすること

メリット 規格外の力、超能力（念力とか）、魔法（という名のなにか）が与えられる。
つーか全部おなじじゃね？

ただし、なにが貰えるかはランダムらしい

デメリット 異能力行使による対価、「依頼」をこなすこと

「依頼」とは、まあ俗に言う妖怪退治とか除霊とからしい。

「んで結局どうするのじゃ？はようせんとタイムリミットがきてしまうぞ」

「いいよ、おれだって死ぬのやだし。別にデメリットもそこまでするだけ、ひとつだけしてほしいことがある」

（以下省略）

何で飛ばすかってそりゃあ”禁則事項”ですから。

”ピー”とか”ピー”とかされたし。

ひとつだけしてほしいこと？それは後からわかるぞ。

こうして悪魔と契約を終えて、

「後のことは貴様の世話役にでも聞け」

と言われウサギのぬいぐるみは淡い光を放ちながら消えていった。

そのあとに雪みたいに光の玉が降ってきた。

それは、

父さんがくれた最期のプレゼントを思わせるもので

はかなくうつすらと光っていた。

もしかしたら、そう見えただけかもしれないけど。

俺にはそうみえた。

契約？そんなもんすつ飛ばしますよ（後書き）

雷が頼んだことはいったいなんでしょうね。たぶん次回でわかるはず

俺の生と死　それと花さん（前書き）

主人公がブレイクしてきた。
性格が安定しません

俺の生と死 それと花さん

「・・・ん」

なんかよくわからない夢？をみていたような気がする。

「すっごくうさんくさかったような・・・」

ぼんやりとしていた視界もしいにはつきりとしてきた。

・・・暗い、夜か？

ここで多少の違和感に気がついた。

その1

俺はベットに寝ていたのだが、とてもデカイ

その2

部屋でかくね？

その3

体が動かしにくい

いったい何が起こってるんだろっかね？（*注意：他人事じゃありません）

ガチャ

誰かが扉を開けて入ってきたらしい。

「雷君、起きた？」

声からして、花さん（年齢不詳、自称”永遠の20歳”）っぽいな。

「花さん？」

あれ？これ俺の声デスカ？

声が若干違う、くぐもった声になってら。

花さんはあかりを見つけ、

……花さんが巨大化してる。（不思議現象その4）

「いままでの幻想は捨てたほうがいいわよ」

鏡をさしだした。

……目の前にぬいぐるみがあります。

まばたきをすると、ぬいぐるみもまばたきをします。

右手をあげると、同じ側の手をあげてきます。

結論、

「かわった動くぬいぐるみ？」（不思議現象その5）

「これはあなたよ。

悪魔との対価は”あなたの体”

というわけであなたはぬいぐるみになっているのよ……」

要約すると、

対価 俺雷の体本体の肉体（笑）

それゆえ、一番近くにあつたぬいぐるみに憑依。

見返り 1 すっごく強くなる。

2 飛べます。

3 他人に憑依できます。

4 時間制限つきで元の俺雷および風になれます（変身とい

う）。

, e t c

ま、こんなかんじらしい。

なにこの使えなさそうな能力・・・

憑依ぐらいしかまともに使えないような気がする。

俺は、ああ、やっぱりさっきのはゆめじゃなかったのかな、と少し思ったりしてみた。

もう現実逃避はやめにしよう

わけはわからないが

「ま、なんとかなるでしょ」

ここは気楽に考えよう。困ったときは前向きに考えようぜと誰かが言っていたハズ。

「そういえば、なんで花さんは俺がわかったんですか？」

俺は（まだよくわからないが）ぬいぐるみになっていた。

普通わかるほづがおかしい。

でも花さんは”俺”がわかっている。

花さんあなたは何者ですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4136w/>

バカと悪魔と召喚獣

2011年10月14日01時56分発行